



(上)「ちょっと塩味が足りないんじゃない?」。調理コースの生徒たちに声を掛ける富永さん(中央)
(左)調理コースのOJTが切り盛りするレストランでは、松花堂弁当が4万キップ(約420円)。ピエン
チャン在住の日本人にも人気だ
(右)OJTの最中も、時間を見つけてはお互いがモデルとなり練習を繰り返す。日本のファッション雑
誌も参考にしているという

約100人の生徒が学んでいる。各コースには、初級(2カ月)、中級(3カ月)、上級(6カ月)があり、全課程を修了すれば教育局から修了証がもらえる仕組みになっている。

「設立当初は農村開発や奨学金などの支援をタイで行ってきまして、ラオスが持続的に発展していくためにも、やはり、人々を育てていくことが最も大切だと気付いたんです。07年からはJICAの草の根技術協力事業(パートナー型)を活用しながら、国の未来を担う若者たちの

ために、さらに支援を活性化。08年春にセンターの隣に寮を建設し、地方からも人材を受け入れられる体制になった。

一階の教室をのぞくと、何やら甘酸っぱいにおいが。2週間前に入学したばかりという、初級の調理コースの生徒の実習が行われているところだった。「みんなやる気が満ちあふれていて、教えがいがあります」という講師のノイさんは26歳。04年に同校を卒業し、富永さんの推薦で講師に抜擢された。「最初は私に務まるかどうか不安でしたが、日本やピエンチャンのレストランでの研修を通じて、少しずつ自信が持てるようになってきました」。開校当初は海外から講師を招くことも多かつ

**職業訓練を通じて
国の未来を担う人材を**

2009年11月上旬、東南アジア最大のスポーツの祭典、東南アジア競技大会(SEA Games)の開催を翌月に控え、どこか慌ただしい雰囲気が漂うラオスの首都ピエンチャン。日中は真っ青な空からまぶしい日差しが照りつけ、夕方にはメコン川に真っ赤な夕陽が降り注ぐ。その壮

大な景色を前にすると、誰もがこの国の不思議な魅力に引き込まれていく。

NPO法人IV-JAPAN代表の富永幸子さんもその一人だ。1988年にNGO「国際ボランティアの会(現IV-JAPAN)」を立ち上げ、タイを中心に国際協力に取り組んできた富永さん。94年に隣国ラオスにも支援を広げ、97年には活動を本格化するために移住。この

国に腰を据えて、もう10年以上になる。

富永さんの仕事場は、街の中心部、ピエンチャン教育局の敷地内にある職業訓練センター。IV-JAPANは2000年1月、雇用の機会に恵まれない若者たちを対象に、教育局と協働で同センターを設立。将来の就業・起業に直接つながる技術を伝えようと、調理、理美容、縫製の3コースを設置し、現在



真剣なまなざしで製図に取り組む縫製コースの生徒。「将来、自分のお店を開けるようになりたい。お父さんにもスーツを作ってあげたいな」



職業訓練センターの調理コースで学ぶ生徒(右)と手作業でコメの脱穀に汗を流す青年(左)。どちらも日本のNGOの支援に支えられている

ラオスの人々とともに 国の未来を描こう

悠久のメコン川を抱き、
天然資源にも恵まれ多様な発展の可能性を秘めるラオス。
この国の未来を支えようと、さまざまな分野で日本のNGOが活躍している。
現地の人々とともに汗を流す彼らの活動現場取材した。



from ラオス
LAOS

市街地から車で約1時間、プロジェクト対象地域の一つ、ナムパ地区パデン村に到着すると、この日のために、農民たちが手づくりの竹製の橋を掛けてくれた。そしてその橋を渡ると、黄金色に輝く田んぼが目に入り、飛び込んだ。初めてSRIに挑戦したというソムヌックさんは稲穂を高く掲げて「こんなに獲れたんだ」と笑顔を見せる。奥さんも「一生懸命草取りを頑張ったんですよ」とうれ

と協働で、ビエンチャン市サイタニー郡、ヤプリ県バクライ郡、ルアンパバン県ルアンパバン郡の3地域でSRIの普及に取り組んでいる。その日、SRIがうまく実践されているかどうか、ルアンパバンまでモニタリングに出かけた島崎さんと現地スタッフのタリー・サリチャンさん。普段はビエンチャンを拠点に活動している彼らだが、このように定期的にプロジェクトサイトを訪れ、県の農業普及員や農民とコミュニケーションを図るようにしている。「農民たちと常に直接かかわり合いながら仕事ができることが強み。何か問題があればすぐに対応できるようにしています」。



(上) 稲穂を片手にうれしそうに話すソムヌックさん夫妻。今季はSRIの導入により、一本の根から65本の茎が収穫できた
(右) 手づくりの橋を渡って田んぼへ向かう。豊かな自然と農民たちの温かさが、心を癒やしてくれる場所だ
(左) ビエンチャン中心部にあるNGO-JICAジャパンデスク。NGOのミーティングにも活用されている

ラオスの人々にたくさんの笑顔が広がっていくように、NGOとJICAは、共に現場で汗を流しながら、ラオスの明るい未来を描けるよう、今後も挑戦を続けていく。

しように話してくれた。「農民たちが誇らしげに『うまくいった』と説明してくれるとき、その目の輝きを見ると『やっつけて本当によかった』と感じます」と島崎さん。農業普及員の一人、アヌサック・カンティヤラートさんは、「北部の山岳地帯で水田の面積をこれ以上広げることが難しい。SRIに積極的に挑戦し、将来的には県の稲作面積全体の50%以上に普及させたい」と語る。「資金面やスタッフ不足など、

連携の懸け橋 NGO-JICA ジャパンデスク

NGOとJICA—開発途上国の発展に貢献したいという気持ちは同じ。JICAは互いの

強みを生かしながらよりよい連携を図っていくため、世界23カ国にNGO-JICAジャパンデスクを設置、活動のサポートや情報提供などを行っている。ラオスもその一つ。ビエンチャン中心部に「ICATE LAOS」を構え、JICAとNGOの関係者が月1回ミーティングを開き、活動報告や情報共有などを行っている。

ビエンチャンから飛行機で約40分、北部に位置する世界遺産の町ルアンパバンでは、NPO法人プロネット21の島崎一幸さんが中心となり、「低投入型稲作技術(SRI)」の普及が進

ラオスで活動する日本のNGOは、現地に事務所を持つものだけでも9団体。活動に携わる人のバックグラウンドはさまざま。個々の経験や知識を生かし、現地の人々と向き合いながら日々奔走している。ビエンチャンから飛行機で約40分、北部に位置する世界遺産の町ルアンパバンでは、NPO法人プロネット21の島崎一幸さんが中心となり、「低投入型稲作技術(SRI)」の普及が進

められている。SRIの特徴は、乳苗を広い間隔で一本植え、湛水と落水を数日ごとに繰り返すこと。従来の方法と比べて、水管理、草取り、有機肥料の投入など手間は増えるが、うまくいけば同じ面積で約25パーセントの収量増が見込まれる。70年から2年間、青年海外協力隊の農業隊員として、ラオスで活動した経験のある島崎さん。その後もコンサルタント会

社に籍を置きながら、国際協力一筋の人生を歩んできた。SRIは必ずラオスの農業の助けとなるはず。長年の経験からそう感じた島崎さんは、06、07年にかけて、ビエンチャン市近郊でSRIの実証試験に挑戦。自信は確信に変わっていった。そしてさらに活動の幅を広げるべく、JICAの草の根技術協力事業(支援型)にプロジェクトを申請。07年からJICA

新しい稲作技術で 農民の生計向上を目指す

「卒業後、すぐに即戦力となる人材を育てるためのプログラムです」。そのほかにも、就職相談や卒業後のフォローアップを行うなど、生徒一人一人との対話を通して、きめ細やかなサポートを心掛けています。当面の課題は、今後いかにセンターの運営を教育局に引き継いでいくかということ。「いつまでも私たちが支援を続けるのではなく、いずれは彼ら自身で運営できるようにしなければ意味がない。そのためには、マネージメント能力の強化を図る必要があります」と、富永さんは強調する。

鏡を前に真剣にブローの仕方を学ぶ



自ら田んぼに入り、農民と協議をする島崎さん(中央)とサリチャンさん(左)。草の根レベルの声を拾い上げることも彼の役割の一つだ